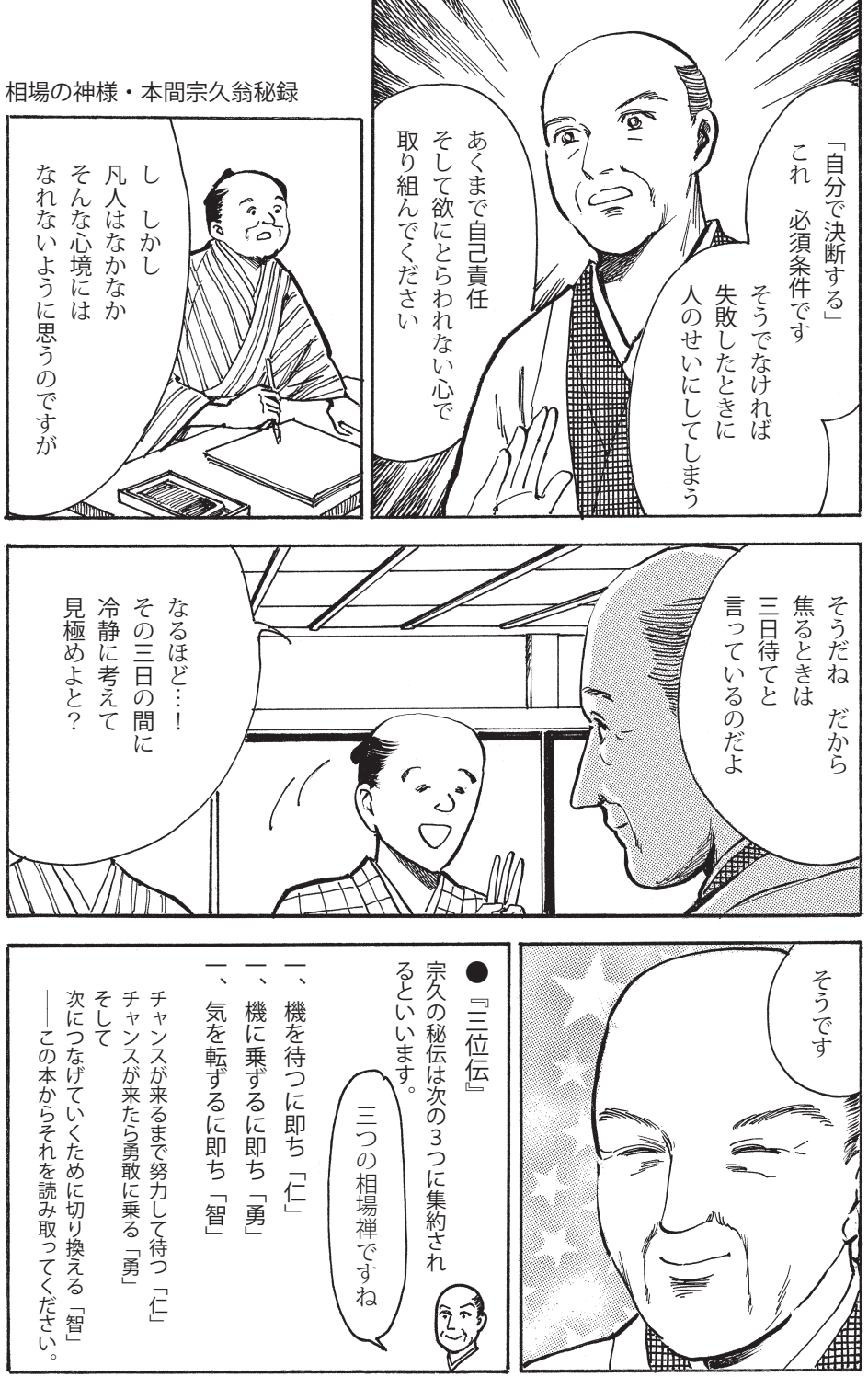
第一章

米商は附出し大切の事

一、米商は、附出し大切なり。附出し悪しき時は、決して手違ひになるなり。又商進み急ぐべからず、急ぐ時は附出し悪しきと同じ。売買共、今日より外商い場なしと進み立つ時、三日待つべし、是伝なり。得と米の通ひを考え天井底の位を考え売買すべし、是三位の伝なり。底直段出ざる内は、幾月も見合せ、図に当る時を考へ売買すべし。商急ぐべからずとは、天井直段、底直段を見ることなり。附出し大切とは、考の外の事出る者なればなり。天井底を知るときは、利運にして損なきの理なり、利運の米は、強気思はず、百俵上げを見切り、商仕舞、四五十日休むべし。休むと云ふは、底直段を見るの理なり。前後能々考へ、受用すべし。

一、商いはスタートが肝心です。どういうときに、どうやって開始したのか。その中身の質が悪いと、その先、必ずおかしなことになります。また、焦ってもいけません。焦るとスタートが悪いのと同じ結果になります。売り買いともに「今日、なんとかしなくては」と心が焦る時は、三日待ちなさい。これが秘伝です。米（相場）の動きを冷静に見て、天井と底をよく考えて売買しなさい。これが「三位の伝」です。底値段が出ないうちは幾月も見合わせ、利の運に合う時を考えて売買するべきです。焦ってはいけないというのは、天井と底をちゃんと見極めなさいということです。仕掛けが肝心というのは、相場では思いもかけないことが起こるものだからです。天井と底を知れば、利に恵まれ、損を避けることができるのは道理です。利運に乗っているときは強欲を出さず、一〇〇俵上げで見切っておきなさい。手仕舞ったら四〇～五〇日は休みなさい。休むというのは、次の底値段を見切るためです。よくよく考えてこの秘伝を使ってくださいね。


先生
「三位の伝」って
なんですか？
秘伝だから
わざと
ハッキリ
言わなかった
え
がくっ
なんて　冗談だよ
番号こそ
つけなかったけれど
内容はちゃんと言ったから
自分でつかみ取って
ください
それに
これから何回も
繰り返しますから
大丈夫
そ
そうですか
あの「踏み出し」とは
仕掛けのことでしょうか
うむ
それもあるけれど…
どういう気持ちで
始めたのかが
まず重要です
強欲にとらわれていない
澄んだ心でないと
見通しが
狂ってしまうのですよ
あの…
最初　人に薦められた
とおりにするのは
いかがでしょう
よく
聞いてくれました！
それ　絶対にいけません
「自分で決断する」
これ　必須条件です
そうでなければ
失敗したときに
人のせいにしてしまう
あくまで自己責任
そして欲にとらわれない心で
取り組んでください
し　しかし
凡人はなかなか
そんな心境には
なれないように思うのですが
そうだね　だから
焦るときは
三日待てと
言っているのだよ
なるほど…！
その三日の間に
冷静に考えて
見極めよと？
そうです
●『三位伝』
宗久の秘伝は次の3つに集約されるといいます。
三つの相場禅ですね
一、機を待つに即ち「仁」
一、機に乗ずるに即ち「勇」
一、気を転ずるに即ち「智」
チャンスが来るまで努力して待つ「仁」
チャンスが来たら勇敢に乗る「勇」
そして
次につなげていくために切り換える「智」
――この本からそれを読み取ってください。

第二章

下相場月頭強く月末弱き事

二、下る米は、月頭は強く、月末廿九日晦日迄下る者也。上相場の通ひは、月頭弱く、月末は強く、急上の方也。五月迄の売附は、思入次第廿九日迄見合せ、仕舞ふべし。六月の売附は、決して廿一日迄に、サッパリと仕舞ふべし。

二、値が下がっていく米の動きはこうです。月初めは強いけれど月末になるまでは続かず、二九日、三〇日と下がってしまう。逆に上がるときの動きは、月初めは弱く、パッとしないように見えるのだけれど、月末に強くなって、最後にぐっと上がるのです。五月までの売りは、思い入れ次第で二九日まで見合わせてから手仕舞いしましょう。六月の場合は逆に二一日までにさっぱりと手仕舞いしたほうがいいですね。

第三章
引上大騒の節
火中へ飛込む心持ちの事

三、米段々上がる時、諸国不時申出し、大阪相場も加へ、跡も引上候沙汰、御蔵米等申立、猶々上げ人気も強く、我も買気に付候節、心を転じ売方に付候事肝要也。是則ち火中へ飛入思切、一統騒立節は、人々西に走らば、我は東に向ふ時は、極めて利運なり。人の戻る頃、後れ馳に西に向ふては、何時も利を得ることなし。二ツ仕廻、三ツ十分、四ツ転じ、是第一三位の秘伝なり、忘るべからず。

三、値が上がって来る時は、いろんな良い噂が流れます。（相場取り引きの一番活発な）大阪のことや（米の産地の）最上の備蓄米のことなど、あちこちで景気の良い材料がいっぱい噂されて、人気が上昇します。そうすると、皆、自分も買わなくてはという気になって、「私も私も」と言い出しますが、そんなときこそ心を転じて、売りに回ることが肝心です。これは、火中へ飛び込む決意をするのに似ています。人が皆、西に向かって走るときに、自分だけ東に向かって走るような場合は、極めて利運が高いのです。人が戻ってくる頃、遅ればせに西に向かうような後手、後手では利を得ることはできませんね。二つで仕舞って（二番天上で売って）、三つで十分（3回目で全部利食いして）、四つで転じる（4回目はドデンで転じる）これが三位の秘伝です。忘れないでください。

第四章
人も我も同じ見込の節
海中へ飛入心持の事

四、米段々下げ、上方相場替事無、諸国ならびに最上払物沢山の風聞、人気も揃ひ弱く、何程下るも知れ難く、我が考も弱かるべしと思ふ節、心を転じ買入るべきなり。此思切、海中へ飛入心持甚だ成悪き者なれども、其節疑の気を生ぜず買ふべし、極めて利運なり。下と見込む時、思入の通下る者なれば、心易き者なれども、人気下ると片寄る時は、却て上る者故、考に及ばざるなり。上も同断、即ち海中に飛込む心持、極意なり。

四、今度は下がるときのことをお話しましょう。下がるときはぼちぼちと各地でいろんなマイナスの噂が立ち始め、米産地の最上でも払い米（売り）が沢山出る、などと噂が立ったら、どんどん人気が下がっていきます。すると、どこまで下がるかわからないという不安な気持ちになって、弱い心にとらえられてしまいます。しかし、そんなときこそ、心を転じて買いに入るべきなのです。これは海の中に飛び込むような気持ちなので、なかなかできることではありませんが、疑わずに買うことが、大きな利運を呼びます。下がると見込まれているときに、見込みどおりに下がるなら、こんなに簡単なことはないのですが、なかなかそうはいきません。往々にして極端に下がると、かえって上がったりするものなのです。迷うことはありません。火の中に入ったり、海の中に入ったりする。この一瞬の判断が極意です。

第五章

冬より正二月迄持合ふ米の事

五、冬中より、正二月頃迄、底直段にて持合ふ米は、三四月より五六月、決して上るなり。

五、米の値で、冬中底値で保ち合ったときは三四月、あるいは五六月になって上がりますよ。だいたい底値が三カ月くらい続くと、上がりが近いことが多いのです。

第六章　急に下げ急に上（あが）る相場の事
第七章　冬より正月迄（まで）
　　天井直段の米見様（みよう）の事
第八章　七八九十月天井夏下げ（てんじょうなつさ）の事

六、急に下げ、急に上る相場は、天井底の日限定まらず見計らひを取て仕廻ふべし。其節、二ツ仕廻、三ツ十分、四ツ転じ、是れ三位の秘伝なり。

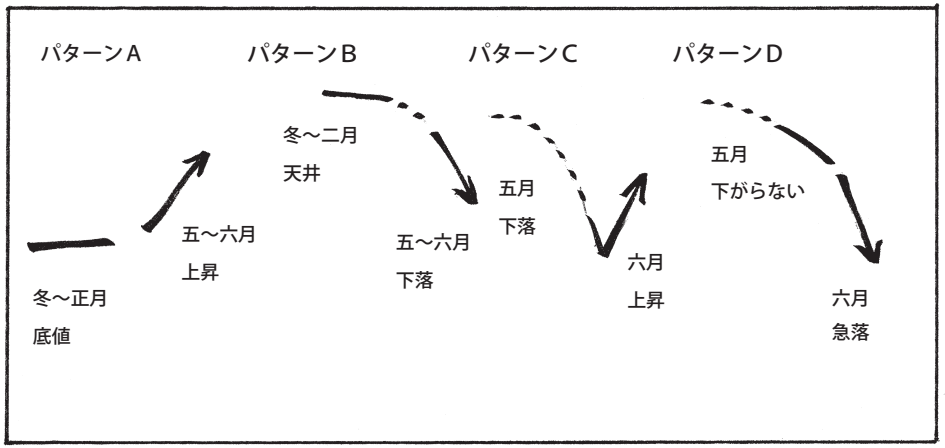
七、冬中正月頃迄底直段の米は、五六月上るべし。冬中より正月二月頃迄天井直段の米は、五六月下るべし。五月十分に下る時は、六月急上なり、五月下らざれば、六月決して崩るべし、疑なし。七八九十月迄も底直段の米は、十二月迄に上ると心得べし。

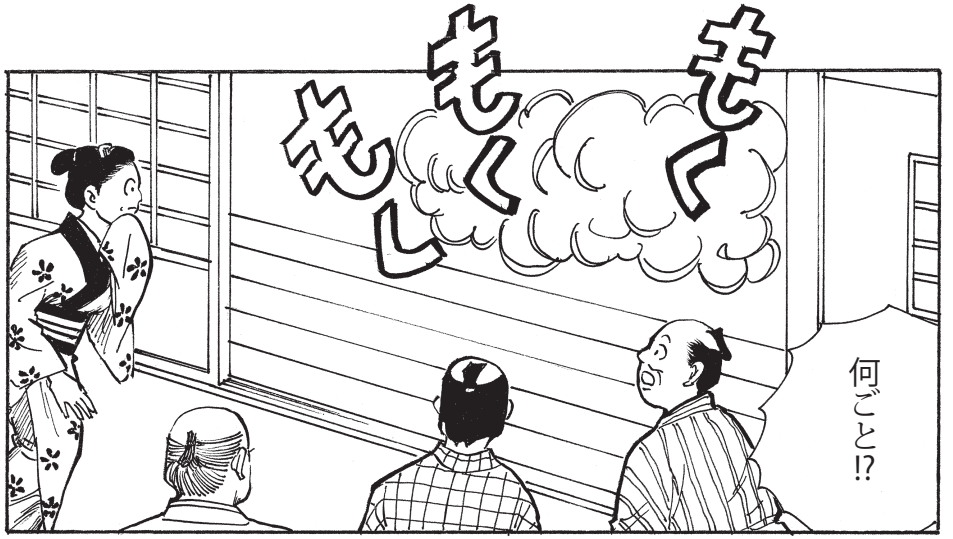
八、七八九十月天井直段の米は、十二月迄に下ると心得べし。思入多き年は、決して夏下げなり。

六、米（天候等の影響で）急に上がったり下がったりすることがあるけれど、その場合は迅速に対応しないといけないですね。二つで仕舞って（二番天上で売って）、三つで十分（3回目で全部利食いして）、四つで転じる（4回目はドデンで転じる）これが三位の秘伝です。

七、冬、正月頃まで底値の米は、五六月に上がるよ。冬から一～二月まで天井値を続けた米は逆に五六月に下がるね。五月に十分下がったときは六月に急に上がる。五月に下がらなければ六月にどっと値が崩れるのは疑いなしだ。七～十月まで、ずっと底値の米なら、十二月に上がると思っていい。

八、七八九十月の間、天井値を付ける米は十二月に下がると思いなさい。思い入れの多い年は、必ず夏に下がりますよ。

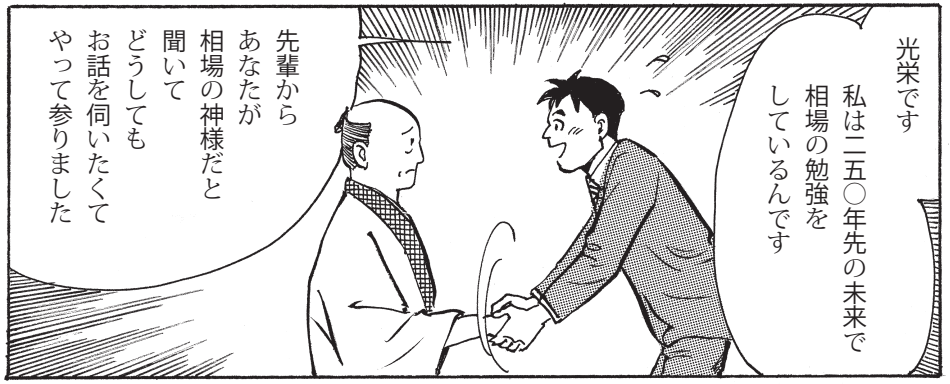



もくもくもくもく
何ごと!?

あぜん

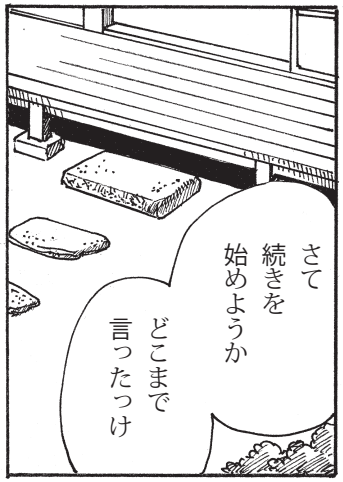
こんにちは
私は二十一世紀の未来からやってきました

あの もしかして あなたが 本間様 ですか?
はあ


光栄です 私は二五〇年先の未来で 相場の勉強を しているんです
先輩から あなたが 相場の神様だと 聞いて どうしても お話を伺いたくて やって参りました

はあ そう…
私は 神様では ないけれど…
せ 先生 大丈夫ですか? こんなわけの 分からない人 叩き出し ましょうか?
いや いいよ なんだか珍しい お客人のようだ

せっかく私の話を 聞きに来て くださったんだから まあ どうぞ お上がりください
ありがとう ございます


さて 続きを 始めようか
どこまで 言ったっけ

第九章

不作年駈引（ふさくどしかけひき）の事

（前半）

九、当地六七月雨勝涼敷、時候冷々敷、天気稀なる年は、此方近国共極めて不作なり。又九州西国、中国、畿内、東海道、奥州筋共、順気作合年々不同なり。北国上作、関西不作、又西国上作、関東不作、其年々大概東国に順ずると雖も、其違あるなり、能く能く考ふべし。又当地六七月不順にて、稲尺なく、田の中窪み、元簿くとも、六月末方より七月廿日頃迄に照り続くときは、急に見直し上作の方になるなり。又六月より八月迄の間、大風、洪水、虫付等の天災浅深に、能々気を付くべし。此事、当地は申すに及ばず、九州上方専らなり。

扨、霜月限新商、古米※ならびに其年の作の見聞釣合を以て、五六十俵より百俵安に商出初てより、大概四五十俵下げ稀なり。其年の作の見当を以て、商出る故、累年十俵より二三十俵位の下にて、其年の変により上に向く也。上方当地、不作天災等にて、六月出初より急上げになることもあり。何れ其年々、不作の浅深、天災、古米の多少、九州国々の様子にて大阪高下出次第、当地に高下出づる故、油断すべからず、誠に変化極まりなし。但し其年の底直段より起き上る米は、五俵下げては十俵上げ、十俵下げては二十俵上げ、往来して、八、九、十、十一、十二、正月迄に、天井直段出ると心得べし。此天井になり、極不作年は、二三ケ月も持合下らざることあり。正二月頃より少々宛不位になり、四五六月に至り、高直の米故船々も買進まず、特に六月順気能く、土用中照り込み人気悪くなり、殊更六月は、素人、黒人、他所買持の衆共仕舞月故、大崩れになり、七八十俵より百俵下げ位に、段々下がると心得べし。